

# 宮崎県現代俳句協会会報

第 59 号

2023.1.15

発行

発行所

宮崎県  
現代俳句協会

発行人

山口木浦木

編集・事務局

吉村 豊

〒880-1224

宮崎県東諸県

国富深年 175

TEL・FAX

0985-75-8873

印刷所

(有)鉾脈社

巻頭随想

## 畑仕舞

池袋 寛

初冬を迎えるこの時期、田仕舞、畑仕舞という言葉にはほっとするものがある。炎暑の雑草除去や病虫害防除を経て、ともかくも収穫が終わったのである。南国宮崎では、冬でも農作業の途切れはないが、ともかくもゴールである。ところで、畑仕舞という季語はありそうでない。農作業を締めくくる節目の日は「事納め」で、十二月八日になる。「箕祭」（みまつり）箕納・鉾納なども同様の季語だろう。歳時記にはこれらの季語はおろか「田仕舞」という言葉なども採録されなくなりつつある。土から離れた生活をする様になった日本人には仕方ないことだろう。

私が、これらの言葉に馴染むのは歳時記より、農事暦である。農事暦は四季それぞ

れの時期における農作業やそれにかかわる年中行事を定めた暦で、年末を迎えた農業関係の月刊誌には付録としてついている。私はその暦を参考に種まき、移植、病害虫対策、収穫など準備する。

農事暦はもちろん「旧暦」（太陰太陽暦）である。月の満ち欠けの周期をひと月にして、小の月29日、大の月30日を、交互に繰り返す。12ヶ月は354日だから、約3年に一度13か月となる「閏月」がある。しかし、この暦では月と季節が合わない。そこで太陽の運行をもとに24に区切った二十四節気をつくった。二至二分（冬至や春分）四立（立冬など）、を中心に白露や大寒など約15日間隔で季節を6等分している。二十四節気をさらに3等分した七十二候もあり、俳句では馴染み深い。月日を太陰（月）季節を太陽の動きで作ったのが旧暦である。暦の世界は奥深い。

長谷川 寛「日本人の暦」参考

太古の時代から、月の満ち欠けや日の出の位置で月日や季節を表す自然暦というものはあったが、推古天皇の頃中国から朝鮮半島を通じて暦を作成するための暦法や天

文地理が伝来し、旧暦の原型ができた。その後、日本の気候風土に合わせ幾度となく修正が重ねられ、「天保暦」として江戸時代によく完成した。その知恵と工夫が明治五年の新暦の導入とともに否定される。

俳句も農業も、身近な自然が相手なので旧暦との関係はこれからも続くだろう。しかし、自然あつての暦である。今、COP27が紛糾している。世界的な異常気象、ウクライナ戦争で加速するエネルギー危機などから、地球の未来を守るための世界的な取り組みである。一歩でも前進して欲しい。あまりにも激しい変化の中では「古きよきものに現代を生かす」ことはできない。五風十雨、天候も世の中も平穩無事であってほしい。

最後になったが、宮崎の現代俳句協会創立30周年を記念した「現代俳句の集い」が盛会裏に終わった。尽力された皆さんに感謝します。また、長友巖さんが「小島静郷全句集成と俳句人生」を出版された。祝意を伝えたい。私が俳句を始めるきっかけは静郷さんだった。

## 第二十六回誌上句会

令和四年十月十日投句

各自特選句一句（二点）、入選句三句

（一点）を選句。

### 十点句

綾取りを指が覚えてゐる夜長

早稲田りょう子

選者特選

・あるは居るにしたい。指が覚えてゐるに好感。  
（玉木節花）

・「指が覚えてゐる」が素直に納得でき、人生の哀歎を詩情が紡ぐ。  
（長友巖）

選者入選

・当たり前っぽいが夜長の余情にひかれる。  
（布施伊夜子）

・綾取りは女の子だけでなく男もやった。それがとても上手な子もいた。秋の夜長ふと思ひ出してやってみると指が勝手に動く驚きと感動。  
（藤田長汀）

・夜長には綾取りでもしないと・・・指は頭よりも確か。  
（小倉櫻子）

・秋の夜長、ふと幼い頃の思ひ出が・・・共感の一句。  
（廉谷展良）

・折り鶴も指が覚えていてくれました。  
（清水睦子）

### 七点句

淡々と別れの言葉芋の露

藤田長汀

選者特選

・芋の露の風情と別れの関係が言い得て妙。  
（山口木浦木）

・「淡々と」と書かれて、その裏の深い思ひが伝わる。下五が別れの情景を表わしている。  
（吉村豊）

選者入選

・淡々と別れの言葉にひかれた。  
（玉木節花）

・芋のようなお方とは淡々と別れなさい。  
（小倉櫻子）

・芋の露が意味深です。  
（鈴木康之）

### 六点句

身に沁むや繻く父の手沢本

小倉櫻子

選者特選

・父上の努力の跡、手沢本が良い。  
（疋田恵美子）

・亡き人の物にはすべて愛着があります。見る物解る物身に沁みます。  
（倉田玲子）

選者入選

・父親への尊敬の念を感じました。  
（藤野々子）

・身に沁むやの上の句と父の手沢本がよく合っている。  
（川島宏幸）

敬老の日を牛井の二倍盛り

妹尾題弘

選者特選

・今どきの老いの日々はまだまだ元気、と

思いたいです。余裕と元気をいただきました。  
（清水睦子）

選者入選

・敬老の日のお祝いが牛井の二倍盛りなのが質素で良い。  
（山口木浦木）

・増々お元気で。  
（小倉櫻子）

・牛井をいつもの倍食べられたのでしょうか。健胃で元気な人と思いました。  
（海蔵由喜子）

・人生まだまだやりたいことやらねばならぬことがある。「老い」など無縁の作者が見える。「を」、「二倍盛り」が効いている。  
（亀田りんりん）

身の程の甘さ小粒の早生蜜柑 仁田脇一石

選者入選

・身の程の甘さがよい……  
（玉木節花）

・知足の大事さを早生蜜柑で表現。  
（山口木浦木）

・程良い甘さの早生蜜柑が嬉しい。  
（疋田恵美子）

・身の程の表現が良かった。小粒ながらも甘く存在感があるのだとも。  
（藤野々子）

### 五点句

産土の山河くまなく紅葉茸く

藤田長汀

選者特選

・故郷への想いを感じられる句。紅葉した美しい景、茸くの表現も良いと思ひまし

た。

(藤野々子)

選者入選

・長年見て育ったふるさとの景を佳き言葉で詠まれたと思う。(早稲田りょう子)

・ふるさとの山河はいま錦秋のとき、この人も…。(長友 巖)

人生の助走ながなが秋岬

長友 巖

選者特選

・「人生の助走」がどこまでかは、その人の目標や達成感によって違ってくる。下五の「秋岬」は秋空のもと、陸が尽きてあとは飛翔を連想させ、長い助走が終わったのか。(吉村豊)

・助走と秋岬の取り合わせ良し。

(宇田蓋男)

選者入選

・ここは思い切ってジャンプするのみ。渾身の。嘆いているようでそんな決意も。「人生」に対峙する(秋の岬)という感じ。(妹尾題弘)

一〇三歳の師の眼澄み秋の鹿

疋田恵美子

選者特選

・一〇三歳の阿辺一葉さんいつまでもお元気で。(鈴木康之)

・高齢の恩師への敬意を込めての一句か。

(福富健男)

選者入選

・一〇三歳の兜太とは違う市井の人のりんとした生き様。(仁田脇一石)

帰省子も去りて地虫の鳴き始む

踏田 拓

選者入選

・帰省子が三日が限度、帰ってうれし、地虫の温もりが良い。(永田タエ子)

・帰省子への想いの深い句。滞在中は帰省子中心の生活で毎日が過ぎ、周囲に心は向かわなかった。帰ってしまったと急に周囲の音が。虫の音にも気が付いた。判る判る。(藤田長汀)

・行く夏と来る秋を寂しさで切り取った一句。上手い。(廉谷展良)

・子らの帰った静かさ、淋しさ。やつと虫の声も聞こえるー素直に感動。(佐藤聡美)

・にぎやかな日々からまた常の日常へと。(清水睦子)

四点句

人の死に軽重のあり菊の花

玉木節花

選者入選

・社会の有様ですね。(鈴木康之)  
・法相の笑えぬ言葉。(疋田恵美子)  
・あつてほしくないが、生きている人から軽重をはかられる。しかし家族にとつてはみな重い。(早稲田りょう子)  
・人の死に軽重などあつたらいけない…し

かしある：季語がよい。(佐藤聡美)

春風にカタカタ絵馬が鳴りやまぬ

福富健男

選者特選

・春らしさを良く詠んでいる。リズムも良く心地よさを感じる。(川島宏幸)

選者入選

・今、多くの人が、せめて絵馬でもいいから願い事を書きたい、と思っているのでは？春風なのになんとなく落ち着かないし、少しさびしい感じ。(服部修一)  
・作者のこの句を何度も推敲されて、その努力と執念に敬服。「絵馬(ことごと)と」を「カタカタ絵馬が」に推敲され、より不安と願いが奏でられている。(亀田りんりん)

秋日和祖母の得意の遊び歌

藤野々子

選者特選

・小春日の縁側などで前ぶれもなく祖母が数え唄などを唄ってくれた。か細く郷愁に満ちた声で思わず聞き入ってしまう。(藤田長汀)

選者入選

・祖母の人生のぽおくと温いものをいだけきました。(永田タエ子)

水澄むや日記すなはち備忘録

布施伊夜子

選者特選

・一度忘れて、頑張っと思いつ出したことは忘れないというがそれもあやしい。書いてあればこそ記憶が遡る。共感できる句。  
(早稲田りょう子)

選者入選

・日記やメモ書き総てが備忘録となり共感。  
(藤野々子)

・同感！若い日とは違う日々が過ぎていく。  
(長友巖)

苦瓜に目あり口ありゴジラかな

佐藤聡美

選者特選

・確かにゴジラだ“うむ”を言はせぬ断定の一句  
(廉谷展良)

選者入選

・苦瓜をゴジラと思われたことに感心し、面白い句だと思いました。  
(海蔵由喜子)

・苦瓜の表面はゴジラの様子に似ている。実にうまい取り合わせである。  
(川島宏幸)

百日紅ニキロ走れば連帯感

服部修一

選者特選

・ジョギングも仲間がいると継続できます。夏の厳しさをぜひ乗り越えてください。  
(池袋寛)

選者入選

・花言葉はあなたを信じる。  
(鈴木康之)

・連帯感が今の日常にはうれしい。

(清水睦子)

三点句

姉妹の半分が逝き傘寿の夏

井上秀子

選者特選

・同世代の心境かと。

(小倉櫻子)

選者入選

・姉妹さんは何人ですか、淋しくなりましたね。  
(海蔵由喜子)

霧雨を振りかけている目分量

山口木浦木

選者入選

・天ならば「目分量」で霧雨とすることも可能だろう。科学が進んでも自然の下で生かされている人間ということを思う。

(妹尾題弘)

・ごはんに「振りかけ」を振りかけるとき、経験で目分量で欠けている。霧雨を振りかける、とはどういう情景、どんな意味だろう、誰が振りかけているのか、と謎めいた俳句でおもしろい。

(服部修一)

・霧雨のこまかさを振りかけている目分量と喩えたところが☆  
(佐藤聡美)

萩散らしユンボ操る夫の手よ

梶原敏子

選者特選

・きびしい山間部で生活を支える様が夫の手に集約されている。萩散らしとユンボ

の動きが新鮮。  
(仁田脇一石)

選者入選

・一気にユンボ操る夫の「手」にもつていく上手さ。ユンボの機械音、真剣な表情、そして巧みにシヨベルを上下左右に動かし、土砂をすくい上げさせる手の動きが見えてくる。見守る妻も見えてくる。季語の「萩散らし」が決まっている。  
(亀田りりん)

茹で上げて禪もなきへちまかな

亀田りりん

選者特選

・茹で上げられて、つるんと裸のあられもないへちまを想像する。せめて禪をはかせてやりたい。  
(服部修一)

選者入選

・ユーモアを買う。

(宇田蓋男)

台風去って農夫みな鍬を持つ

梶原敏子

選者入選

・「農夫みな」の「みな」に立ち向う農家の強さが現れている。  
(廉谷展良)

・恐れていた台風も去り、普段の農作業が戻って平和な感じが出ている。  
(川島宏幸)

満月や月より地球見てみたい

鈴木 康之

選者入選

・ 同感。折にふれ月を仰ぎ賞でているが、むこうから地球はどう見えるのか？かつてガガーリンは「地球は青い」と言ったができればこれから建設するという月の基地へ行ってみよう。（藤田長汀）

・ 宇宙飛行士のように皆が本物を見られたらどんなにいいでしょう。戦争などやろうとは思わないはず。（早稲田りょう子）

・ 愚かな戦火に包まれる地球は如何にみえるだろう。（藤林伸岳）

### ファミレスも老の溜り場秋深む

藤 野々子

選者入選

・ 昔の若者の今ですかね。（藤林伸岳）

・ 昔はファミレスは家族の楽しい食事の場。近年までは若者たちの溜り場。いまやファミレスも高齢化社会の縮図になりました。（服部修一）

### ちんちろりんサイコロ振れば振り出しに

早川 たから

選者入選

・ 良いことを何度しても、悪いことを一度すると人生は…。（宇田蓋男）

・ なんでもない取り合わせの可笑しみ。（長友巖）

### 二点句

秋蛭母はむごんの夢枕 早稲田りょう子

選者特選

・ 亡くなった母親が夢枕に立つ。優しい笑顔で。「むごん」と平仮名での表現が何も言わずとも母の優しさを伝える。会いたい。秋蛭のさみしさがより一層会いたい気持ち掻き立てる。（亀田りんりん）

### 諸物価やあゝ生醤油の衣被

吉村 豊

選者特選

・ あえて「諸物価」に意味を持たせない詠みをしているが、読むほどに衣被を食べるささやかな幸せを奪いかねない戦争と円安による物価高騰が思われる作品。（妹尾題弘）

### 胆囊全摘して猛暑日猛暑日

長友 巖

選者特選

・ 今年も猛暑日が続き、私もやつと毎日を通り越しました。手術をされて心身とも大変でした。御大事に。（海蔵由喜子）

### かじられてゐるまぐはひのカマキリ

疋田恵美子

選者特選

・ 男は純情、はて女は般若の一面を隠しているのか？（藤林伸岳）

### パタパタと家電製品の寿命この秋に

吉村 豊

選者特選

・ 家電製品を買いそろえるのがほとんど同じ時季。日常生活ではほとんど同じ時に寿命を迎える。不思議な日常。（永田タエ子）

### 秋惜しむスタバの風のテラス席

妹尾題弘

選者入選

・ 秋のさわやかさをスタバテラスで活写。（山口木浦木）

・ さわやかな一句。（藤林伸岳）

### 名月を愛でては雲に体当たり

山口木浦木

選者特選

・ 体当たりには八つ当たりの情あるもこの月のゆえと納得。（布施伊夜子）

### 遠花火見むと遠くへ行く二人

早稲田りょう子

選者入選

・ 若さならではの行動と読む。まぶしい。（布施伊夜子）

・ 遠花火には花火と違う趣がある。華やきよりも落ち着いた世界。意志ある「遠くへ行く」から長く寄り添った二人が思わ

れる。

(妹尾題弘)

雨脚は俄かに強し宮中三殿賢所

福富健男

選者特選

・立ち姿の美しい凛とした一句。

(佐藤聡美)

一点句

棘かくすブーゲンビリアは葉の裏に

服部修一

星月夜西には戦火絶えざるを

選者入選

池水 侃

・古来何かと戦火の続く西方。星月夜に希望を祈る。  
(仁田脇一石)

ひまわりの大統領が伝え反り

選者入選

鈴木康之

・下五の「伝え反り」は大相撲九月場所です。宇良関が二十年ぶりに繰り出した幻の決まり手。圧倒的な兵力差をあの手この手で奮戦するゼレンスキーへのエール。  
(吉村豊)

ゆるやかにソファーに沈む長き夜

佐藤聡美

選者入選

・何かと忙しい日常を切り抜けた安堵感がただよう。  
(仁田脇一石)

蓼咲いて子守の哀れ唄ひつぐ

布施伊夜子

選者入選

・日本の子守唄は口べらしのために幼くして奉公に出された子守の子達の哀切な唄が多い。しかしその唄が今も口をついて出てくる。蓼の花が良く合っている。  
(吉村豊)

葉の陰にエロスの花やカンアオイ

亀田りんりん

選者入選

・そう言えばそう。花の名、漢字の方が感じが出る。  
(布施伊夜子)

秋蝶のひらひら庭へ小昼どき

選者入選

井上秀子

・我家の庭で幼虫から成虫へ。愛しき蝶々よ。  
(正田恵美子)

満月や思いめぐらす児の名前

選者入選

倉田玲子

・当たり前の表現に好感がもてる。  
(宇田蓋男)

猫こぼし犬をこぼしてこぼれ萩

早川たから

選者入選

・先日動物愛護センターへ見学に行った。保護された犬と猫と出会って考えさせら

れた光景でした。

(永田タエ子)

その他の句

雑然と冬がそこだよ玉手箱

永田タエ子

昼顔や鬱去らわれてまた憂う

海蔵由喜子

切り売り後残りし狭庭涼新た

踏田 拓

のれん内酒と遊んで根無草

永田タエ子

肩丈の草の穂や透き渡る風

清水睦子

蘇る荒さぶ嵐の彼岸花

川島宏幸

想い出の山吹秋に隠れ咲く

仁田脇一石

鼻寄せて金木犀の花ごこち

清水睦子

燦燦とコスモス靡く散歩道

川島宏幸

魚舟風を待ち遙かを取り渡る

小倉櫻子

鯉跳ぶや高き声して石たたき

池水 侃

松葉牡丹咲きつづく院リハピリす

海蔵由喜子

「なんちゃって国葬」とか台風一過

玉木節花

### 第五十九回現代俳句全国大会

十一月十二日に小倉市で開催され、大会  
セレモニーと各賞授賞並びに大会作品入選  
句授賞式の後平出隆氏の講演が行われた。

大会作品は九、一六六八句で、予選後の  
三、五四八句について特別選者二六名、一  
般選者一五三名で選句された。

以下、特選句・入賞句・高点句

**特別選者特選** 前川弘明選 **佳作入賞**

折鶴に鋭角いくつ昭和の日 長友 巖

**一般選者特選**

鈴鹿呂仁・谷下一玄・武藤紀子選

追伸のようになかなか夕暮れる

永田タエ子

月森遊子選

ふる里の空の果てまで麦青む

永田タエ子

高橋和彌選

ふるさとのカタカナになる浜防風

仁田脇一石

林 桂選

合歓の昼暗きに入るかくれんぼ

亀田りんりん

吉田功選

今は雪国『チェルノブイリの祈り』の里

福富健男

**七点句**

青空のこぼるる棚田水を張る

永田タエ子

### 第七十一回宮崎県民俳句大会

十一月二十日に宮崎市宮日会館で開催さ  
れ、募集句（ジュニアの部選者三名・一般  
の部選者一四名）、当日句（選者五名）の  
大会作品について披講・選評・表彰が行わ  
れた。以下、会員の入選作品

**特選句**

緒方眞帆子選

ひまわりの二本にここに保育園

藤田長汀

永田タエ子選

ふと我に返る湖畔の大夕焼

倉田玲子

**入選句**

布施伊夜子・本村蠻選

書を曝し読みし月日も曝しけり

早稲田りょう子

本村蠻選

臭木咲くころなり津々も浦々も

布施伊夜子

妹尾題弘選

楠の新緑リトアニアから来てバツハ曲

福富健男

永田タエ子選

虫の夜や人それぞれに暮らしあり

吉村 豊

長友巖・川口正博・河野真選

抽斗の奥に抽斗蟬時雨

岩切雅人

長友巖選

振り返ることは真つ平かなぶんブン

妹尾題弘

川口正博選

好色の血筋早めに摘む胡瓜

岩切雅人

永田タエ子選

自愛なりたちまち茂る畑の草

吉村 豊

吉村豊選

南部風鈴語り継がれる大震災

海蔵由喜子

画素粗き父母の写真や終戦日

藤野々子

猪八重のなんじゃもんじゃの昔の花

福富健男

着いてから口実さがす土用波

山口木浦木

吹き抜ける晩夏の二階碁石置く

仁田脇一石

## 会員の句集等の発行

長友巖編著「小島静郷全句集成と俳句人生」

小島静郷さんは昭和三〇年代から俳句作家として「鏝」同人の活動を中心に本県の現代俳句を牽引して来られ、平成三〇年に逝去された。その軌跡について活動を共にして来られた長友巖さんがこの度まとめられたものである。内容は大きく「全句集成」と「俳人小島静郷の人と作品」、「資料編」からなる労作である。

「全句集成」の特に前期の作品には、御自身の闘病から一家をなしてさらに事業を展開される中で強い意志とたゆまぬ努力で立ち向かわれたことが、俳句にも強く表れており、「現代俳句を創って行く」というひたむきな創作努力が感じられて感動を覚える。

「俳人小島静郷の人と作品」と「資料編」は、静郷さんを軸にした本県現代俳句の草分け期からの歩みが詳しくわかり、大層貴

重な資料である。

特に、お名前だけは知っているがお会いしたことがなくその人となりは知らない本の戦後俳句の草創期に活躍された方々との交流譚はいろいろなエピソードがあつて興味深いものがある。

癒えてわが家に炭の割口みな光る  
柚子湯ゆたかに血は濃し迅し婚期くる  
やがて夜業の樹が美しい時間となる

冬海も血縁ひとすじ陽が流れ  
秋耕の柄を生涯の軸となす

沖繩や軽き頭蓋を持ち歩く  
自然薯掘る長さ哲学読む長さ

初ひばり十萬億土目指すなり  
わが胸の上は御空や鷹渡る

死はひとり紅葉の褥ありて足る

## 会員訃報

当協会創立当初からの会員で、独特の句風で本県の現代俳句を牽引して来られた副会長の宇田蓋男さんが去る十二月二七日に満七四歳で逝去されました。

宇田さんは本名博敏、昭和二三年七月に福岡県嘉穂郡でお生まれになり、若くして俳句を始められて海程・海原・流域・拓・青銅の会で活躍され、「宇田蓋男句集」を昭和六〇年に刊行されました。

突然の御逝去でとても残念ですが、御生前のご厚誼に感謝し、謹んで御冥福をお祈

りいたします。

## お知らせ

・宮崎県現代俳句協会 令和五年度総会  
日時…二月一九日一〇時から  
会場…宮崎市の青少年プラザ

(神宮東一の二の二七 真栄寺隣)  
午後は新春句会

・年会費の納入について

全国会員は千円・県会員は二千円

総会参加者は当日集めます。

欠席の方は、今年は役員交代がありませんので、総会で会計役員が決まってから納入先をお知らせします。

全国会員を退会された方はて県会員の会費になりますので御注意ください。

## 編集後記

明けましておめでとうございます。

今年は戦災や疫病が治まって明るい句が詠める年になることを祈ります。

発行が遅くなりましたが、会報五九号をお届けします。コロナ禍の中で吟行句会を中止にするなど、会員が触れ合う機会が少ないため、誌上句会の句評を入選句にもお願いしてできるだけ会員に誌面に多く登場していただきました。これまでの「私の今年の一句」は次号から「会員近詠」として募集します。(吉村 豊)